



Title	S. Anderson : Winesburg, Ohio
Author(s)	梅垣, 清
Citation	Osaka Literary Review. 1962, 1, p. 70-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25766
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

S. Anderson : *Winesburg, Ohio*

梅 垣 清

Winesburg, Ohio は Anderson の代表作である。殆んどの批評家達は、*Winesburg, Ohio* とそれ以前の三つの作品との間には「芸術作品」と「單に自己を表出したに過ぎぬもの」との違いがある、と言っている。*Winesburg* ¹出版の後も勿論多くの長編小説、短編小説を書いている。それらの中には *Death in the Woods* (1933) をはじめいくつかの完璧とも言へる短編小説がある。しかしながら、質的にも量的にも *Winesburg* に比肩し得るものは無いようだ。この作品が単に S. Freud とか D. H. Lawrence の思想を模倣したものに過ぎないと考える人があるが、当らない。例えば Lawrence だが、Anderson はこの作品を書き上げる以前には未だ彼を読んでいない。² もっとも、この二人の間には気質の類似が認められることは確かである。とにかく、Anderson の偉大さとか、アメリカ文学に対する貢献とかを論ずる場合、まずこの作品を問題にしなければならない。成程彼には凡作も多い。その為に彼を無視する傾向が屢々見られる。しかし間違っている。或る作家の偉大さを充分に見極めようとする場合、主としてその作家の代表作を問題にしなければならない。

昨年、Edwin T. Bowden : *Dungeon of the Heart* (Macmillan) という本が出た。副題に ‘Human Isolation and American Novel’ と銘打ってある通り、アメリカ文学の中に William Bradford 以来今日迄受継がれている（と Bowden は力説する）「孤独」のテーマを追求した研究である。Bradford の *Of Plymouth Plantation* を序論にし、以下 J. F. Cooper から J. D. Salinger に至る迄十二人の作家が論じられている。

因に、これら十二の小説に扱われている「孤独」を検討した結果、この著者が得た最終的解決、つまり孤独から逃れる最良の方法は、‘the loss of self in love or sympathy or concern for others.’ (137) であり、‘faith and dependance on God, in the loss of self to the greater truth of God.’ (171) である。そしてこれを完全になし得たのは *Moby-Dick* の Ishmael だったというのである。ところで、この本の中で *Winesburg* が論じられている。この小説のテーマが「孤独」であると考えそれを論じたことは勿論正しい。この著者によれば、Anderson は孤独に対する、上に示したような満足のゆく解決を持たない。*Winesburg* の主人公達は相互に理解し合うことはあっても一瞬の間だけである。つまり、Anderson が孤独に対する永続的な、何時もしっかりと持ち続けることのできる解決を提示できなかったことに著者は不満を感じている。要するに、それが論理的でなく、感情的だから物足りないということだろう。

ところで、Anderson の作品には明晰な論理がないと指摘する批評家はかなり多い。例えば、L. Trilling は Anderson に対してはかなり手厳しいのだが、その理由はこの論理性の欠如ということと大いに関係があるようだ。Anderson には「感情」(emotion, feeling) はあっても「知性 (intellect, mind)」がないと批判し、更に付け加えて、反知性主義を標榜する、例えば、W. Blake や W. Whitman の如き詩人でさえ唯単に知性を弾劾するだけに止ったのではないことを主張する。

話を *Winesburg* に戻そう。もし、Bowden が試みたように（そしてこのような試みは一般的には大層有益であることは認めねばならぬが）この小説の中に孤独に対する論理的な解決を求めようとすれば、その結果は矢張り失望に終るだろう。そしてそれはその儘この小説の評価に繋ることにもなるだろう。しかし、この小説をそのような角度からのみ論ずるのは正しいことであろうか？ Anderson の意図は唯孤独の解決ということにのみ向けられていたのだろうか？ そうは思われない。

この小説が二十四の短い挿話 (episode) から成っていることは衆知の事実である。しかし所謂短編小説集ではない。これは Anderson が作り出した新しい形式 (form)⁴ の小説なのだ。内容を扱措いてここで形式を論ずるのは不適切だと思われるかも知れぬ。しかし特にこの小説の場合、形式と内容が全く密接に結びつき、渾然一体となっている。この二つのいづれに対する誤解も作品の価値を著しく減少させる。しかもこの小説の出版以来この形式に関する誤解が多かった。そして未だに残っている。

一見無造作に、そしてなかには簡単な筋さえ持たぬあまりにも短い挿話が二十四並べられている。だからといって比較的面白ろそうなものだけを読んだり、各挿話の優劣を論じたりすることはこの作品の正しい解釈には危険である。⁵ では何故 Anderson はこのような形式を必要としたのか？理由はこうだ。

But life itself is a loose, flowing thing. There are no plot stories in life.⁶

真の人間生活を効果的に作品に移そうとしたのだ。そして無造作に並べられているようにみえるが、各挿話は繋りを持っている。

There were individual tales but all about lives in some way connected.⁷

この結果、この小説はそれぞれの挿話が独力では満足に出せないような雰囲気を醸し出すことに成功している。各挿話が互に何らかの役割を果しながら、一つの調和ある全体を構成している。取分け、*Winesburg* に於て Anderson が語ろうとしたことは、後述するように、もしこの形式を使わなければ殆んど意味をなさなくなるであろう。晩年 Roger Sergel に宛てた手紙の中で、Anderson はこの形式のことに触れて、‘That is really a novel. It is a form in which I feel at ease. I invented it. It was mine.’ と述べている。

劈頭を飾っている ‘The Book of the Grotesque’ はこの小説の序論と考えられているが、同時に又結論と見做することも出来る極めて重要な挿話だ。これを単なる序論と見誤り、その意味するところを深く見極めぬと以下の挿話の解釈に大きな誤謬をきたす。この後に続く二十余りの挿話を「各論」とすれば、これは「総論」に当る。その要点はこうである。

ある老作家が寝床に横になっている。半ば眠りかけた時、つまり夢現の状態にいる時、彼の目の前を長い行列が通り去って行く。彼等は皆この作家が知っている人達。しかもその行列に加わっている男女は総て「グロテスク」なのである。老作家はこの行列から強い印象を受けたので、それについて書き始める。そしてその中心思想として次のような内容を持つ *The Book of the Grotesque* という本を書き上げる。

... in the beginning when the world was young there were a great many thoughts but no such thing as a truth. Man made the truths himself and each truth was a composite of a great many vague thoughts. All about in the world were the truths and they were all beautiful.... And then the people came along. Each as he appeared snatched up one of the truths and some who were quite strong snatched up a dozen of them...the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsefood.

言う迄もなくこれが *Winesburg* の中心思想である。この小説に含まれている各挿話の主人公達は、George Willard という少年を除いて、総てが多かれ少なかれグロテスクな人物達だが、彼等がそうなった理由を上の文章は象徴的に示してくれる。彼等は皆以前は美しい「真理」に憧れ、それを追い求めた人達なのだ。しかし一旦彼等が「真理」を獲得すると彼等は

各自の「真理」を独占し、自分一人のものと考えるようになる。折角苦労して手に入れた「真理」も、誰か一人の人間が独占すると、忽ち「虚偽」に変り果てる。何時何処で誰が持つても常に変らぬ永遠絶対の「真理」などは存在しないからなのか？それとも一つ一つの「真理」は多くの人間が多くの「漠然とした思想」から苦心して拵えた物だから、能力に限りある一人の人間には到底独占できるものではないからなのか？いずれにせよ、「真理」が「虚偽」に変るというのだから、ここには最早「真理」というものに対する絶対的な信頼は認められない。それは、それを追い求める人間をグロテスクにさせるという点で、甚だ危険でさえある。これは興味深い「真理」論だ。勿論、この作品が書かれた時代の一般的な雰囲気とも無関係ではなさそうだ。

自分達が後生大事に持っている「真理」が「虚偽」に変っていることも知らず、自分達の持っているものこそ絶対の「真理」だと信じ続ける。彼等は徹底的に「自己中心的」(egotistic) である。互に人の「真理」は認めない。相互理解がない。孤独である。自分の殻の中に閉籠ってしまう。このように他人との交流がなく、自分だけの狭い世界から一歩も外へ出ず、精神的な澁み、腐敗をきたす姿こそグロテスクなのである。各挿話に登場するグロテスクな人物達は、例えは、病身で衰弱しているとか、容貌が醜いとか、不潔であるとかいうように多少共外面がグロテスクに描かれている場合が多い。しかし多くの場合このようなグロテスクな外面は彼等の内面の象徴なのだ。印象主義的 (impressionistic) 手法が使用されていると言えるかも知れない。要するに、「グロテスク」の意味を誤解してはならない。後述するが、彼等のグロテスクな外面も美しいものに変る時があるのである。

‘The Book of the Grotesque’ に続く二十余りの挿話は豊かなバリエイションをもって上にみたようなテーマを繰り返す。どのような「真理」があるか、人々はそれ等をどのようにして発見するか、どれ程懸命にそれを固守するか、そして結果はどうなるか、といった事が追求分析される。

そして全挿話を読み終った時、一つの完成された極めて印象的なグロテスク像が浮び上ってくる。

各挿話の主人公達は、既に述べた通り、彼等の「真理」を持っている。肉欲を軽蔑する女を妻に持つ牧師 Curtis Hartman が、ある日、美しい肌を顔に見せて泣きながら何かを祈っている女を教会の窓から覗き見る。その姿が教会の窓に描かれている、キリストを恍惚として眺めている少年の姿にそっくりなので、彼はそれを「神の力」の顯示であると思い込む。そして肉欲を持っても人間として悪い筈はないしと信じ始める。例えばこの牧師のように、主人公達は過去に自分の「真理」を発見している。子供に物を教える最良の方法は、子供を「手」で愛撫し夢の世界に引入れることだと信ずる Wing Biddlebaum。偉くなる為には他人に対して軽蔑と憎悪の念を抱かねばならぬということを、偉かった（と彼が思っている）彼の兄から学び、信じている Doctor Parcival。Alice Hindman は若い頃村の男に身を許したが、その男が都会に職を求めて村を去る時残した「もう我々は互に離れられないんだよ」という言葉を信じ、帰らぬ男に何年も操を立て続ける。Wash Williams は、可愛いくてたまらなかった妻に裏切られて後は、全女性を「牝犬共 (bitches)」と呼んで心から憎み続ける。これとは反対に、女のデリケートな心理を理解しようとせず唯体だけで女を愛そうとする男性というものを激しく憎んでいる女 Louise Bentley。宗教できえこのような「真理」の供給者になり下る虞れがある。Jesse Bentley は自分が平凡な人間ではなく、選民であり、是非神の為に何か偉大な事を行わねばならぬと信じ込む結果、周囲の人々を敵視するようになる。

他にも色々「真理」がある。いざれにせよ、このような主人公達は自分が完全だと信じて譲らぬ「エゴチスト (egotist)」だから孤独にならざるを得ない。孤独を紛わす道は二つである。Elmer Cowley のように「薄馬鹿者 (a half-witted old fellow)」に自分の心を吐露するか、あるいは自

分の中に理想の世界を作ったり、そこに幻の人間を住まわせて彼等と交わったりするかのいずれかである。どちらの場合も一方的な振舞いが許される。自我 (ego) を持つ現実の人間と交わる場合には常に相手を意識する必要がなく、楽である。Enoch Robinson は画家であるが、仲間が彼の絵を理解してくれない為彼の「細長い狭い室」に鍵をかけそこに幻の人間を住まわせる。

With quick imaginatin he began to invent his own people to whom he could really talk and to whom he explained the things he had been unable to explain to living people. His room began to be inhabited by the spirits of men and women.... It was as though every one Enoch Robinson had ever seen had left with him ¹⁷ some essence of himself,...

Jesse Bentley は自分の農場に働いている使用人を見て旧約聖書に書かれている世界を幻想し、神が天から降りて来ることを熱望する。孤独な Alice Hindman にとっては、彼女の部屋の中の総ての無生物が彼女の話相手となる。各挿話の主人公達の多くは、多少の違いはあっても、それぞれこのような現実の世界から孤立した世界を持っている。しかし、彼等も人間である以上、何時迄もこんな世界に閉籠り続けることは不可能である。幻ではない、現実の、生きた人間と話し合い理解し合いたいという強い欲求が起る。Alice の胸の中にもこの気持ちが芽生える。

Deep within her there was something that would not be cheated by phantasies and that demanded some definite answer from life. ¹⁸ 孤独に耐えきれなくなった Alice は、或る雨の夜、裸で通りに走り出る。通りに見えた人影に向かって、「待って！行かないで！」と叫び出す。現実の人間との関係を取戻そうとする死物狂ひの努力である。この挿話の題名 'Adventure (冒險)' とは Alice のこの必死の努力のことであるが、他の大抵の主人公達もこの種の冒險をする。彼等はあまりにも自分達の「真

理」に執着していたので、つまり自我を固持していたので、これができなかつた。この冒険は彼等が自我意識から解放される瞬間に行われる。この瞬間は彼等に大きな喜びや幸福感を与える、文字通り無我夢中にさせる。グロテスクな人間もこの瞬間一変することに我々は注意すべきだ。例えば、Wing Biddlebaum の日頃の声はグロテスクな人間に相応しく「低く震えている」が、この瞬間には「大きく鋭い」ものになり、「曲った」体も「真直」になる。「漁師が小川に投げ戻した魚」のような元気さだ。町で「最も醜い」そして「不潔」な Wash Williams も、自分を George Willard に理解させようと努める時には、「美しい青年」に見える。顔には不健康を示す斑点があり、色艶もよくない Kate Swift も「極めて美しい容貌」になる。Gerge Willard の母でグロテスクな人間の代表のような Elizabeth Willard は、病身であり、「長身で痩れ、顔中天然痘の傷痕だらけ」なのだが、彼女さえ Doctor Reefs と話す時は美しくなる。

“You dear! You lovely dear! Oh you lovely dear!” he muttered and thought he held in his arms, not the tired out woman of forty-one but a lovely and innocent girl who had been able by some miracle to project herself out of the husk of the body of the ²⁰ tired-out woman.

しかし、この状態は一瞬の間に終ってしまう。忘れられていた自我意識が再び帰ってくる。折角取扱った壁を再び廻らすことになる。彼等は他人に自分達を理解させようとした事に腹立たしさをさえ感じ始める。自分の部屋に鍵までかけた Enoch Robinson も、偶々廊下で顔を見た女性が激しく彼の室をノックするので中に入れる。これ迄の何度も失敗にも拘わらず又も自分を理解させたいという不思議な衝動に駆立てられる。成功する。しかし相手が自分を理解したと分ると腹立たしくなる。彼女が部屋から出て行った時、彼がその部屋で一緒に住んでいた幻の人間達も一緒に外に出て行ってしまう。「真理」を人に渡してしまった後、彼は一層深い

孤独に陥ってしまう。Alice は既述の冒険の後、次のように悟る。

... turning her face to the wall, (she) began trying to force herself to face bravely the fact that many people must live and die alone, even in Winesburg.²¹

人を軽蔑することを彼の「真理」として持っていた Doctor Parcival は、交通事故に遭って瀕死の状態にある少女の診断をさえ冷淡にも拒絶するのだが、後で、その無慈悲な仕打ちに対する人々の報復として磔にされることを恐れながら、George Willard にこう語る。

... everyone in the world is Christ and they are all crucified.²²

自分の「真理」を守るのに汲々とし、その結果愛を失い、罰として磔に処せられるのはこの医者だけではなく、多少共人間全体がそうなのだ、人々は皆グロテスクであり孤独なのだ、ということを上の言葉は暗示しているように思われる。

この小説の中には、人間が孤独に陥るのを防ぐもの、グロテスクになるのを食止めるものを何とかして見出そうとする Anderson の努力が示されていないわけではない。最初の挿話 ‘The Book of the Grotesque’ の中で、老作家がグロテスクにならなかった理由は彼の心の中に「若々しいもの (the young thing)」があったからだ、と述べている。各挿話の孤独な主人公達の多くが George Willard に接近するのは、彼が持っている若々しさに憧れるからであろう。事実上この小説の大詰とも言へる挿話 ‘Sophistication’ でこの少年と、同じく若い Helen White の二人は「現代の社会で人間が生きてゆくことを可能にさせるもの」、すなわち人間の相互理解を達成する。ではこの二人は他の主人公達、人間は結局孤独だと認めている人達と全く異なるのだろうか？矢張り彼等の持つ「若々しさ」が孤独を取除く唯一の方法なのか？Anderson がこの二人の場合を孤独に対する彼の理想の解決にしようとした、ということは考えられぬことではな

い。しかし、もしさうであったにしても、それは実質上はグロテスクな人物達のものと変わらない。何故ならば、この二人はそれを、論理によってではなく、瞬間的な「動物的興奮 (animalism of youth)」によって成し遂げたのであるから。「若々しい動物的興奮」を常に持ち続けることはこの二人にとっても殆んど不可能である。一方、グロテスクな人間達も瞬間に「若々しさ」を取り戻すことができるのである。結局、Anderson には瞬間的な解決しかあり得ないのでだ。‘Death’の Doctor Reedy が、Anderson に代って、次のように語る。この場合、「愛 (love)」とは唯單に男女間のそれに限らず、それをも含めた更に広い意味の愛であると解さねばならない。

“Love is like a wind stirring the grass beneath trees on a black night,” he had said. “You must not try to make love definite. It is the divine accident of life. If you try to be definite and sure about it and to live beneath the trees, where soft night winds blow, the long hot day of disappointment comes swiftly and the gritty dust from passing wagons gathers upon lips inflamed and made tender by kisses.”²³

「夜の快い風」が吹く時、他の人間に対して愛の感情が芽生える時、つまり一瞬自我意識が消える時人間は孤独ではない。しかし、仮に、Anderson がこの「夜の快い風」を孤独を解決するものとして提示したにせよ、皮肉にもそれは、瞬間的であるということにより、却って「砂塵の立上る暑い長い絶望的な日中」を、つまり孤独を強める結果になっている。Anderson は、度々、グロテスクな人間が孤独の美しさを持っていると言う。跪く孤独な Wing Biddlebaum はあたかも神に仕える牧師のように神々しく見える。²⁴ 公園等にいる鉄の檻に入った猿を次のように描写し、グロテスクな人間がこのような美しさを持っていることを我々に教える。

In the completeness of his ugliness he achieved a kind of per-

verted beauty.²⁵

彼等が、グロテスクではあるが、一種の美しさを持っていると感じるのは、孤独が避けられないものであり従ってそれに耐えねばならぬということを Anderson が充分に知っていたからではなかろうか？²⁶

この小説の舞台は、題名が示す通り、北方十八マイルにエリー湖がある人口千八百の Winesburg という架空の田舎町—村、と呼ばれることもある一である。Anderson が少年時代を送った Clyde という町がそのモデルであると言われている。しかしこの小説は単に中西部の町とその住人達の経験だけを描くことを目的としているのではない。それらはより普遍的なものを表現する一つの手段としても使われているということを知らねばならない。同じく中西部の田舎町を描いた Sinclair Lewis の *Main Street* (1920) 等とは異った面を持っている。この点で、J. Schevill が *Winesburg* が「神話」(myth) としての性格を持っていると力説するのは正しいように思われる。²⁷ 要するに、この小説の目的が産業や機械文明の発達に取り残された田舎町の人々を描くこととか、原始主義 (primitivism) への復帰を提唱することとかにあったと限定してしまってはならない。確かに一つ一つの挿話はそのような内容を持っている。しかしこれらのものは、この小説全体としての目的ではなく、一つ一つの「真理」の象徴として使われていると解すべきだ。もしこれらの中のどれか一つだけを描くことがこの小説の目的であったとすれば、この作品はこれ程の寿命を持たなかつたであろう。Anderson 自身がこの作品について述べた次の言葉はこのような考え方を支持してくれるかも知れない。

The book was written in a crowded tenement district of Chicago. The hint for almost every character was taken from my fellow lodgers in a large rooming house, many of whom had never lived in a village.²⁸

以上述べてきたように、この作品の中心テーマは自我を持った人間なら誰しも逃れることのできない孤独である。自我意識と孤独は不可分に結びついている。このこと自体は特に Anderson を持ち出すまでもなく、多くの人が指摘してきた。Anderson が偉大であるのは、「真理の独占」とか「グロテスク」といったイメージやその他我々の想像力を刺激する巧みな象徴や独自の構成を使って、人間のこの最も普遍的な事実を他の誰よりも強烈に我々に印象づけたからである。大体が Anderson は理屈でものを捏ねる種類の作家ではない。豊かな想像力で事物の神髄 (essence) を照らし出すことが巧みな作家なのである。

この小説を高く買わない人々の重な理由は論理性の欠如、謂わば ‘how to live’ がないことだということは既に述べた。しかし我々は ‘how to live’ を知る為には ‘what life is’ を正しく知っていなければならぬ。例えば、人間の孤独とは何かをその本質に於て知っていなくてはならぬ。蓋し本質を離れた解決等は無益だからだ。人間の孤独な状態を強烈に印象づけ、それを逃れる明確な方法が示されていない点で、成程この作品は否定的、絶望的な色合いを帯びているとも言える。そしてこの意味でこの作品が最高級の文学ではないと言う人があれば、それも正しいかもしれない。だが一方、孤独というものの核心に迫ったという点から見直される時、この作品は人間全体に対して極めて大きな貢献をしたと言わねばならない。

‘The Book of the Grotesque’ の中で、「私 (I)」という人物が老作家の物語 *The Book of the Grotesque* を読んだ後その本に就いて次のように語る。

By remembering it I have been able to understand many people
and things that I was never able to understand before.²⁹

小説 *Winesburg, Ohio* が成し遂げたものはまさしくこれなのである。

註

1. James Schewill: *Sherwood Anderson*, Denver U. P., p. 93

- Irving Howe: *Sherwood Anderson*, Methuen, p. 91 等.
2. V. W. Brooks: *The Confident Years 1885-1915*, Everyman, p. 526 他にもこの点を強調する批評家が多い。
3. L. Trilling: 'Sherwood Anderson,' *The Liberal Imagination*, Doubleday, pp. 20-31.
4. E. L. Masters の *Spoon River Anthology* (1915) からヒントを得た。
5. 実はこの小説の中のいくつかの挿話は, *Winesburg, Ohio* として1919年に出版される前に既にいくつかの雑誌に寄稿されていた。例えば 'Hands' は1916年に *Masses* に発表された。しかし1919年に他の多くの新作挿話と共に、作者の新しい構想の下に *Winesburg* の一部分となる時、それが持つ意味も当然変ってくる。
6. J. Schevill: op. cit., p. 96 7. Ibid.
8. *Winesburg, Ohio*, Modern Lib., pp. 4-5 以下引用文の頁数は本書から。
9. 'The Strength of God' 10. 'Hands' 11. 'The Philosopher'
12. 'Adventure' 13. 'Respectability' 14. 'Surrender'
15. 'Godliness (Part I, II)' 'Surrender' 'Terror'
16. '“Queer”' 17. 'Loneliness' pp. 201-2 18. 'Adventure' p. 132
19. 'The Teacher' 20. 'Death' p. 278 21. 'Adventure' p. 134
22. 'The Philosopher' p. 48
23. 'Death' p. 272 Anderson は男女間の「性愛」のみを追求したのではない。特にこの小説に於てはそれが言える。何よりも相互理解 (mutual understanding) を望んでいる2人の人間が、偶々男女である場合が多いので誤解が起るのだろう。'Sophistication' はこの誤解を解決してくれる。
24. 'Hands' p. 17 25. 'Respectability' p. 135
26. Anderson 自身が、孤独を逃れようと努力し人にも相互理解の必要性を説き続けながら、生涯 'egotism' からくる孤独に悩み続けたことは彼が残した手紙や言葉から充分察せられる。次の手紙はその一例に過ぎない。To Alfred Stieglitz (1925, 7, 10), To John Anderson (1927).
27. J. Schevill: op. cit., pp. 100-1 H. Gold も 'Winesburg, Ohio: the purity and cunning of S. Anderson' の中で同様なことに触れている。
28. *The Portable Sherwood Anderson*, ed. H. Gregory, Viking, p. 41
29. 'The Book of the Grotesque' p. 4
- * *Winesburg, Ohio* のテキスト及び参考文献は、*Sherwood Anderson 'A Bibliography'* compiled by E. P. Sheehy & K. A. Lohf, Talisman (1960) に詳しい。